

*** 乗鞍コロナ観測所の25cmコロナグラフを三鷹に搬入・保管**

アーカイブ室新聞373号に「乗鞍コロナ観測所から25cmコロナグラフを搬出」したという記事を書いた。この号はその続編で三鷹に搬入した記事である。25cmコロナグラフは12mドームに納まっていた総重量14トンと言われた大きな望遠鏡である。ヨーク式と呼ばれる架台で、南ピアから北ピアに渡されたヨークに全長がほぼ9mの望遠鏡が抱えられた構造をしている。乗鞍コロナ観測所は北緯36度ほどの地の太陽を観測する施設であるため、望遠鏡が天頂を向いて観測することはない。したがって他の天文台で当たり前のスリットが少し北まで開く構造になっていない。これが厄介であった。その点、三鷹の保管場所である天文機器資料館は東西に大きく開くスリットがあるため、寧ろ搬入は容易かった。

乗鞍コロナ観測所には10トントラックは入れないので、分解・解体されドームから吊り出された望遠鏡は4トントラックで畳平第2駐車場に運ばれ、10トントラックに積み換えられた。当初の計画では4日間の分解・解体作業、9月3日に乗鞍から降りて、9月6日に三鷹の天文台に搬入する予定であったが、作業が思いのほか順調に進み、急遽、9月3日三鷹搬入となり、筆者は真夜中に三鷹に帰ることになった。



写真1 三鷹キャンパスでの4トントラックへの積み替え作業

国立天文台三鷹キャンパスへの搬入は9月3日9時からということになっていた。9時には25トンクレーン車、望遠鏡を積んだ10トントラック、8トントラック、4トントラックなどが勢揃いした。しかし、この期に及んで問題が出た。天文機器資料館への道は狭く当然10トントラックは入れないので4トントラックに積み替える手はずは整っていたが、25トンクレーン車が天文機器資料館広場に行くには、子午儀資料館、ゴーチエ子午環への見学アクセス道路を踏まなければ通れないことが判明し、その新しい道路を養生して侵入するために厚手の鉄板3枚が必要になり、その手配搬入を待たなければ25cmコロナグラフの搬入はできないという事態になった。急遽、輸送業者が鉄板を持ち込み、作業がすすめられたが、このため作業は3時間近く遅れてしまった。

このように急な鉄板の調達にも重機輸送の専門家は対処できたことに感心したが、何度も天文台で作業した重機輸送の専門家であったが、事前の調査に手抜かりがあったとも言えた。

三鷹キャンパスでの保管場所とした天文機器資料館は旧自動光電子午環棟の望遠鏡フロアであり、このフロアの耐荷重については事前に調査がしてあったが、300Kg/平米という一般の事務所並みであったため、三鷹に持ち帰った14トンにも及ぶ望遠鏡を組み上げることはできないので、解体・分解したまま広い面積に分散して置く措置をとった。それでも1個で4トンにも及ぶ中央部がついたままの望遠鏡中央部は床に置かないで、ドームスリッ



写真2 天文機器資料館への望遠鏡部分の吊り込み作業

トを支える地中から立ち上がった柱部分に置く工夫をした。



写真3 天文機器資料館に吊り込む望遠鏡中央部

このようにして、乗鞍コロナ観測所閉所後、現地に残され、朽ち果てる運命にあった 25cm コロナグラフは、アーカイブ室の手により三鷹キャンパスに移送され、保管された。保管されたが、分解・解体されたままの状態での保管である。12m ドームに収まっていたこの望遠鏡を復元するにはそれなりの容積を持った建物が必要である。

天文情報センターでは、国立天文台博物館構想を持っており、将来は建設された博物館に復元展示することを目論んでいる。その完成は何年か先のことであろうが、その完成を待っているのは 25cm コロナグラフを三鷹に持ち帰ることはできなかつたであろうと思っている。これほどの大きなものを、復元展示を目指して 2800m の高山から解体して運んだことは過去になかったことであろう。大変な仕事をしたものだと思ながら思っている次第である。一日でも、1 年でも早く天文博物館の実現を願っている。



写真4 吊り込まれる望遠鏡南架台部
この吊り込み作業をしている間に空に現れた現象が写真5である。



写真5 天文機器資料館上空に出た色付き雲